

舞台演劇”I Want My Hat Back”における「生演奏」の効果

Hikari Yoshida

2023/06/26

Jon Klassen が描いた絵本 *”I Want My Hat Back”* が原案の舞台演劇 (Wiks Wilson 演出, Temporary Theatre, London, UK, 2015) がイギリスで上演された。森に棲んでいるクマは、自分が寝ている間に、お気に入りの帽子をウサギに盗まれてしまう。それに気づいたクマが帽子を探すストーリーだ。絵本がもとになっていただけあって、非常にコミカルかつカラフルに演出されており、キャラクターが第四の壁を越えて観客と関わることもあった。この舞台でキャラクターと観客の心理的な距離を狭める効果を持っていた一つに、生演奏による音楽が挙げられる。この舞台では基本的には 3 人のミュージシャンによる三重奏で音楽が生演奏されていた。使われた楽器も管楽器やピアノ、もしくはアコーディオン、ギターなどと、シーンごとによって変わっており、いろんな音楽が使われていた。

ここで、同じ生演奏での舞台演劇 *”The Lehman Trilogy”* (Stefano Massini 著, Sam Mendes 演出, Piccadilly Theatre, London, UK, 2015) を参考にしたい。この作品はリーマンブラザーズの栄枯盛衰を描いた、全く子供向きではない舞台演劇だ。舞台上も無機質でモノクロの小道具しかなく、登場人物は黒のスーツを着た 3 人の男性である。*”I Want My Hat Back”* と共通していることは生演奏であるという点しかない。ただ、両者の生演奏には同じ効果がある。

”The Lehman Trilogy” のインタビュー (注 1) にて、作曲家の Nick Powell 氏はこう語った。

「Candida の演奏は俳優の動きに呼応する。遊び心があるし寄席演芸的でもある。」

ピアニストの Candida Caldicot 氏はこう語った。

「曲が登場人物の行動を盛り上げる一方で、登場人物に呼応もする。(中略) 曲がセリフに合わせて常に変わる。(中略) ピアノも声を持つ。違う観点を持った別のキャラクターにもなれる」

舞台上でリアルタイムに演じている俳優の演技に呼応し、常に変化していくことができるのは、生演奏だからできる芸当だ。キャラクターに寄り添うことも客観視することもできるピアノは、キャラクターと観客をつなげる役割を果たしている。

マスクパフォーマンスにおける「クロッキング」も、客席と観客をつなげる効果を持つ。クロッキングは舞台上にいるマスク (キャラクター) が客席に向ける行為を指すが、マスクの心情の変化を客席に共有する効果を持つ。

“*I Want My Hat Back*”ではキャラクターの心情を、俳優の演技と共に生演奏の音楽と共に行うことにより、より高い解像度で観客に共有していく表現があった。ここでも観客と繋げている役割を果たしている。

例を3つ挙げる

一つ目に最初のシーン。森で起きたクマが自分の帽子を見てうっとりしているところでは、非常に穏やかな曲調の音楽が演奏される。キャラクターと音楽が呼応しあいながら、クマの日常を描いていた。最初の音楽がクマの日常を象徴していたのだ。

二つ目にクマが自分の帽子を盗まれたと分かりショックを受け、森中を駆け回って探すシーン。駆けずり回るときの音楽もコミカルだが、クマの走るリズムに合わせて演奏されており、彼の焦っている様子が描かれている。明らかに普段の様子ではないことが、最初の音楽とのリズムの違いで表現されている。

三つ目に、ウサギが盗んだ帽子に猛烈に興奮し、喜びの絶頂に浸っているシーン。その時に流れる音楽は激しいポップなものであったり、妖艶なものであったりと、とにかく彼の心情を全面に押し出した音楽を演奏していた。

観客との繋がりを得たことで、キャラクターと観客の心理的ギャップを小さくしている。劇中でクマは第四の壁を壊し、客席にいる観客に自身の帽子について尋ねるシーンがあるが、この繋がりの副次的な効果として、観客も舞台の世界観に参加しやすくなっていた。

“*I Want My Hat Back*”の音楽は俳優の演技と併せて演奏されることで呼応し合う。そしてキャラクターの心情をより高い解像度で観客と共有することで、両者をつなげる役割を果たしていた。

参考 Web サイト

注 1：YouTube 動画 “『リーマン・トリロジー』ピアノ演奏者” (<https://youtu.be/cB37PYPjcMk>)